一宮市博物館だより

No.29 2001.10

「八王子遺跡出土銅鐸」
写真提供／(財)愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター

【市制80周年記念特別展】

銅鐸から描く弥生社会

～埋められた銅鐸の謎～

尾張平野では、弥生時代以降遺跡数が増加し、当時の生産力の高さが窺えますが、
その一つの証として、1997年に一宮市大和町苅安賀の八王子遺跡から、全国的にも珍しい、逆さに埋納された銅鐸が出土しました。
今回の展示では、こうした最近の発掘調査で出土した銅鐸を中心に展示し、銅鐸の持つ意味や、銅鐸埋納の意味を考えます。

（写真提供：島根県古代文化センター、加茂町教育委員会、（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター、（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所）

神庭荒神谷銅鐸

1985年に、島根県斐川町・神庭荒神谷遺跡で、銅鐸が6点と16本の銅矛が出土、この遺跡では前年に358本という大量の銅剣が隣接する地点から出土している。

加茂岩倉銅鐸

1996年に、島根県加茂町・加茂岩倉遺跡で、工事中に39点という大量の銅鐸が発見される。土坑の中に入れ子の状態で埋納されていたものと推定されている。

八王子銅鐸

1997年、愛知県一宮市大和町苅安賀の八王子遺跡から、全国的にも珍しい、逆さに埋納された銅鐸が出土した。この銅鐸は、使用痕がはっきり残り、長期間「鳴らす銅鐸」として使われていたことが明らかなものである。

朝日銅鐸

1989年に、愛知県清洲町・朝日遺跡で、鰭を上に向けて横向きに埋納された銅鐸が発見された。こうした埋納方法は、各地で出土する銅鐸に共通するものがある。

西の谷（敷地3号）銅鐸

2000年、静岡県豊岡村西の谷遺跡（敷地3号）銅鐸は、従前銅鐸が出土していた地点における科学的探査で銅鐸が検知され、その後発掘調査が実施されて、銅鐸が発見された。

開催期間／10月6日（土）～11月4日（日）

シンポジウム

銅鐸から描く弥生社会

平成9年3月13日、(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターによって、一宮市大和町苅安賀八王子遺跡において市内ではじめて銅鐸が発掘され、注目を集めました。この銅鐸は、「集落内埋納」「倒立埋納」「吊った痕跡」という3つの点で、全国的にも注目されています。今回のシンポジウムでは、この銅鐸をきっかけに弥生時代における祭祀の変容や、銅鐸からわかる社会的画期について考えたいと思います。そして、今後濃尾平野における弥生社会の構造を捉えていくための礎としようとするものです。

今回の企画は、13日(土)開催のフォーラムと14日(日)開催のシンポジウムの2つの柱から構成されます(下記参照)。

フォーラム　新しい弥生時代像を求めて

シンポジウム『銅鐸から描く弥生社会』に先だって、西と東の弥生時代研究者が最新情報を紹介しながら討論し、新しい弥生時代像を提示します。客席からも自由に討論に参加できる参加型の討論会です。

日時●10月13日(土) PM1:00〜PM4:30
受付●PM12:00から
会場●一宮市博物館(妙興寺公民館)
定員●100名

■コーディネーター
「海と山から見た弥生文化」
愛知県埋蔵文化財センター主査　石黒立人氏

■パネリスト
「畿内と九州ばかりが弥生じゃない、多様性こそが弥生文化」
明治大学文学部教授　石川日出志氏
「視点をずらして弥生文化を見たい」
浜松市博物館学芸員　佐藤由紀男氏
「揺れ続ける弥生時代の見方」
葉山町教育委員会生涯学習課課長代理　伊丹　徹氏
「私たちがみる弥生時代」
東京国立博物館学芸部考古課縄文弥生室研究員　安藤広道氏
「我々の合理性で弥生人の行動を推測できるか」
(財)大阪府文化財調査研究センター技師　若林邦彦氏
「モノが流通する、ヒトが交流する、誰が何のために」
大阪大学大学院文学研究科　寺前直人氏

シンポジウム　銅鐸から描く弥生社会

銅鐸という弥生時代に特徴的な資料を中心に据え、弥生社会の構造に迫ろうとするシンポジウムです。弥生時代以降遺跡数が増大する、また全国的にも珍しい埋納方法で銅鐸が出土した八王子遺跡を有する一宮市で、銅鐸の謎に迫ります。

日時●10月14日(日) AM10:00〜PM5:15
受付●AM9:00から
会場●愛知県一宮勤労福祉会館講堂
定員●600名

■記念講演
「日本文化の源流」
大阪府立弥生文化博物館館長　金関　恕氏
「銅鐸の絵・大昔の絵」
前国立歴史民俗博物館館長　佐原　真氏

■報告
「八王子銅鐸発掘記」
愛知県埋蔵文化財センター調査研究員　樋上　昇氏

■各論
「八王子銅鐸の位置づけ」
京都国立博物館学芸課考古室長　難波洋三氏
「大量埋納された出雲の青銅器」
島根県教育庁参事　勝部　昭氏
「近畿式銅鐸と三遠式銅鐸」
野洲町教育委員会文化財保護課主査　進藤　武氏
「銅鐸研究における多角的視点とその成果」
東京国立博物館企画部企画展示室長　井上洋一氏
「マツリの変貌−銅鐸から特殊器台へ−」
奈良県立橿原考古学研究所調査第一課長　寺沢　薫氏

■シンポジウム「銅鐸から描く弥生社会」
コーディネーター／金関　恕氏
パネリスト／難波洋三氏・勝部昭氏・進藤武氏
井上洋一氏・寺沢薫氏

●そのほか、これからの博物館

展覧会

収蔵品展　くらしの道具―今と昔―

一月十六日～二月二十四日

今年で11回目になる、歴史を初めて学び始める小学校3年生を対象にした展示。来年からは小学校4年生のカリキュラムに変わるので、3年生のための最後の年となる。着物や下駄、ワラゾウリ、マンガや備中鍬といった農具などを展示し、今から70年ほど前のくらしの様子を、道具を通じて子どもたちに紹介します。

センバヤキのお味はいかが？
（2001年1月7日）

作品展　手つむぎ・染め・織り展

三月三日～三月十七日

一宮地方では、江戸時代後期から明治前期にかけて、縞木綿の生産が盛んでした。その技術の保存伝承の為、博物館では繊維講座を開講していますが、本展でその成果を発表します。

講　座

博物館講座　はにわをつくろう

三月二日、三日、十七日

小学校高学年児童とその親を対象にして実施します。「はにわ」は、今から1、500年位前の古墳時代に作られた素焼きのやきもので、野焼きで焼かれました。古墳の上や周りに並べられ、昔、古墳で行われる「おまつりごと（祭祀）」を再現したものと考えられています。形は、様々で、基本形ともいえる円筒埴輪（えんとうはにわ）や、人物や動物、道具をかたどった形象埴輪（けいしょうはにわ）があります。1、2回目に、みなさんの自由な発想で作り、3回目には、野焼きを行います。

はにわをつくる

公　演

民俗芸能公演　島文楽・宮後住吉踊

三月二十四日

博物館では市指定無形文化財となっている「島文楽」「宮後住吉踊」のみなさんをお招きし、毎年公演を行っています。

島文楽

慶応3年（1867）に現在の一宮市大毛の村人が、岐阜市芥見加野白山の渡辺常助から金7両で人形を買い受けました。しかし、若者たちが人形芝居に熱中し農事を顧みないので、2、3年の後、隣村であった島村へ人形を譲ったのが島文楽の始まり。130年以上の歴史があります。

宮後住吉踊

住吉踊は本来大阪市の住吉大社で伝承されている芸能で、お田植祭の際に踊るものです。江戸時代、職業芸能者であった願人坊主がこれを各地に広めました。宮後住吉踊もその一つです。伊勢音頭のほかに「娘道成寺」「日高川」という滑稽芝居を伝えているのが特徴です。

島文楽

宮後住吉踊

博物館ニュース

ビデオ教室外観

収蔵品管理システムと文化財紹介システムが稼働しました

９月１日より、当館学習室ビデオ教室コーナーにおいて、収蔵品管理システム及び文化財紹介システムの公開がはじまりました。収蔵品管理システムでは、普段常設展示では見ることができない博物館収蔵資料を、文化財紹介システムにおいては、市内に散在する文化財を、パソコンを使って紹介します。

収蔵品管理システム

収蔵資料の中から、考古資料450点・民俗資料200点・歴史・美術資料100点・行政資料340点、計1,090点の情報を公開します。キーワードや分類（考古資料だったら、縄文時代・土製品や石製品など）で資料を検索、見つかったものの写真もご覧になれます。

収蔵品の解説画面

文化財紹介システム

一宮市内で、国・県・市の指定を受けている文化財189点を紹介します。文化財を、地域や種類（建造物・絵画・彫刻など）・時代から選ぶことができます。詳しい内容の大人用解説や、子ども向けの解説、写真等がご覧になれます。

文化財の解説画面

学習室とはこんなところ

学習室には、そのほかにも、大きな地図とビデオで文化財が学べる「文化財地図」、子どもに人気のある「歴史クイズＱ＆Ａ」など、いろいろなものが置いてあり、いすに腰かけながら、ゆっくりと学ぶことができます。ご来館の際は、ぜひ学習室もご利用ください。

文化財地図

歴史クイズＱ＆Ａ

桟留機（サントメバタ）

最近、博物館へ寄贈していただいたジョゼフ・ベルナールの『母と子』について愛知県美術館長の長谷川三郎氏にご執筆していただきました。

ジョゼフ・ベルナール（一八六六～一九三一）は、マイヨール（一八六一～一九四四）やブールデル（一八六一～一九二九）とともに、ロダン（一八四〇～一九一七）の次世代を代表する重要なフランスの彫刻家です。ベルナールはロダンの影響が感じられる悲劇的な人間像表現を経て、一九〇五年頃には優美で洗練された独自の装飾的様式に到達します。それは粘土による塑像制作から石の直彫り彫刻へ、彼の主要な技法が転換した時期でもありました。直彫りによる単純化され緊張感に満ちた純粋な形態と、極めて感覚的で優雅な装飾性がベルナールの芸術の特質と言うことができるでしょう。

《母と子》は、ベルナールの裸婦像の中でも最もよく知られている作品です。彼は一九一二年頃にこの作品の小像を粘土で制作してブロンズに鋳造し、その後間もなく等身大の石膏像も制作していましたが、一九二五年、あらためてこの石膏像に手を加えてサロン・ドートンヌに出品しました。ベルナールは、大理石像の仕上げと同じように、石膏の表面を磨き上げて平滑にすることを好みましたが、この作品にも同じ技法が用いられているようです。すべての部分が張りつめた曲面をもつ単純な形に還元され、その明確な分節によって人体が組立てられています。両手をつないで踊っている母と子は二人とも左足の爪先だけで立ち、複雑なアラベスクを構成する群像全体はその二点だけで支えられ、絶妙の均衡を保って軽やかに立っています。そしてこの群像のモティーフそのものの愛らしさは、いつも動物やまだ言葉の分らない幼児に話しかけていたと伝えられるベルナールその人のことを思い浮べさせます。

この《母と子》の等身大完成作には九点のブロンズが知られていますが、そのうち金色に仕上げられたものは一点だけです。そして、それをある日本人が生前のベルナールから直接購入したことが判っています。本ブロンズがその金色の像に該当することは間違いないでしょう。

『母と子』博物館、中庭にて

台座に見られる署名と鋳造銘

作　者：ジョゼフ・ベルナール　Joseph BERNARD（フランス、1866～1931）
作品名：《母と子》
"Femme－l'enfant"（Woman and Child）
制作年：1925年（石膏像をサロン・ドートンヌに出品）
材　質：ブロンズ、金のパティーナ仕上げ
寸　法：高188㎝
署　名：地山の上面にJ・Bernard
鋳造銘：©1926の年記とAlexis Rudier／Fondeur Parisの鋳造所銘

参考文献：Jean Bernard,etc.,JOSEPH BERNARD,1989,Fondation de Coubertin.

奔瀑遊猿

作者　川合玉堂
制作年　一八九七年（明治三十年）
技法・材質・形状　絹本着色軸装（二重箱入）
寸法　本紙　一三三・〇×五五・〇cm
　　総丈　二四二・〇×七二・〇cm
落款　玉堂（印）
伝来　共箱　昭和十六年銘
　　平成十二年度購入

川合玉堂（一八七三～一九五七・木曽川町出身）は、近代日本画の巨匠として多くの人々に親しまれている。本図は、玉堂自らの箱書きにより、明治三十年、二十四歳の時に制作されたことがわかる。その二年前の二八年四月、玉堂は内国勧業博覧会に「鵜飼」を出品して三等銅牌を受賞したが、その会場で橋本雅邦の絵に接し、大きな感銘を受けた。この年、師の幸野楳嶺が死去したこともあり、翌二十九年、玉堂は意を決して東京へ出て雅邦に入門を果たした。長男が生まれたばかりの時で、作品も次第に評価を得つつあり、なかば将来を約束された京都生活を捨て、一人で東京画壇へ飛び込むことは相当な決意がいったであろう。京都で学んできた円山四条派とは画風を異にする狩野派の斬新な色彩と気迫に満ちた表現は、それほど激しく玉堂の魂を揺り動かしたのである。本図は上京翌年の作で、切り立った崖や岩間を走る水流に雅邦の影響を色濃く見ることができる。狩野派を基調とした力強い作風に挑戦していた若き玉堂の溌剌とした様子が目に浮かぶようだ。その後多くの歳月が流れ、昭和十六年に本図は再び玉堂の元にもたらされ箱書きを求められたのである。玉堂は、去ること四十五年前の作品に再会して、自ら「隔世の感あり」と、希望に満ちた若き日の自分を懐かしんでいる。

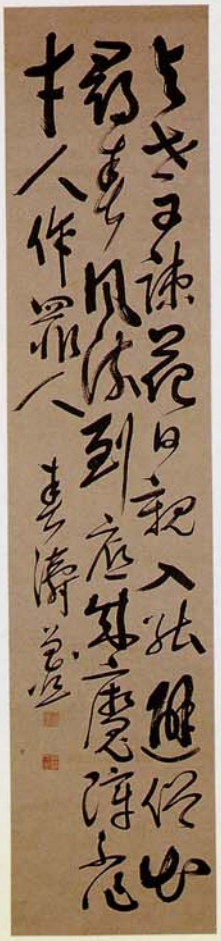
尋春（漢詩七言絶句三行書）

作者　森　春濤
制作年　一八三九年（天保十）以降
技法・材質・形状　紙本墨書軸装
寸法　本紙　一三七・二×三〇・四cm
　　総丈　一八八・〇×四三・九cm
落款　「春濤魯直（印）」
　　平成十二年度購入

森春濤（一八一九～八九）は、一宮村下馬町（現一宮市本町四丁目）出身の明治を代表する漢詩人。家は代々医を業とし、春濤もはじめ岐阜の中川氏に医業を学んだが、むしろ美的世界への憧れが強く、十五歳ではやくも漢詩「岐阜竹詩」を詠んでいる。その後、丹羽村の有隣舎に学び、さらに京都の梁川星巌に入門して尊攘の志士たちとも交遊を重ねたが、政治の世界とは一線を画し、専ら詩人の道を選んだ。四十五歳で医者をやめ名古屋へ移住、文久三年（一八六三）桑名町に「桑三吟社」を、明治七年（一八七四）には東京に出て、下谷御徒町に「茉莉吟社」を開いた。以後、明治の漢詩壇を支える大御所的な存在となった。交友は、鷲津毅堂・大沼枕山・藤本鉄石・頼三樹三郎・家里松嶺・斎藤拙堂、門弟に永坂石埭・丹羽花南・神波即山・永井禾原（荷風の父）など数多い。

没後の明治四十五年に『春濤詩鈔』二十巻六冊が刊行され、二〇〇〇首ほど紹介されているが、未だその全貌は明らかになっていない。本作品の詩は、『春濤詩鈔』巻三所収、天保十年二十一歳の作。揮毫したのは比較的若い頃、三十代から四十代半ばのものと思われる。

（毛受英彦）



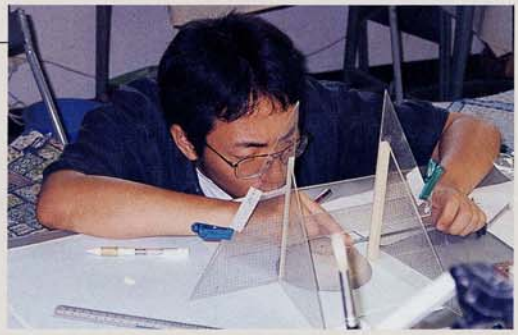
与世日諫花日親／入能避俗出尋春／風流到底成魔障／不作才人作罪人　春濤魯直（印）

博物館実習

今年の夏も、将来の学芸員を目指す８名の大学生が、一宮市博物館へやってきました。
わずか８日間の日程ですが、さまざまな体験をとおして、何を感じてくれたのでしょうか。各部門毎に報告します。

考古部門

考古部門では、遺物の水洗・注記・実測・写真撮影・図版割付・図面トレースなど、出土遺物の整理過程をたどりました。また、フィールドワークとして、今伊勢町に遺る西宮社（さぐちしゃ）古墳の測量調査も行いました。受講者は、いずれの作業にも熱心に取り組んでくれました。また、古墳の測量作業では、暑い中にもかかわらず、測量図を完成することができました。感謝。



遺物の実測作業（担当　土本）

民俗部門

展示を企画し、実践する（担当　久保）

民俗部門では臨場感溢れる実習とするため、民俗調査をはじめとして、実習を越えて学芸員を実践してもらいました。例えば黒岩祇園祭では夜10時すぎまで写真撮影の手伝いをしてもらったり、地元の皆さんと話をしたりと、楽しそうでもあり辛そうでもある実習でした。また、中学生の職場体験の補助をし、調査研究だけでなく普及の大切さを学びました。さらに、名古屋市博物館で開催していた『いこまい愛知のミュージアム』展会場での展示説明補助をする中では、他館の学芸員に接触することによって分野による多様な考え方、方法に触れることができたのではないかと考えている。

歴史・美術部門

歴史・美術部門では、茶道の作法体験、美術品の取扱や写真撮影、行政文書の整理など、多岐に渡る内容を企画しました。限られた時間でしたので、どうしても広く浅くになってしまいがちでしたが、実習生皆さんは、どの作業においても、新鮮な気持ちで一生懸命取り組んでくれました。これからもがんばってほしいものです。

茶道の作法体験（担当　毛受・岩井）

利用案内

名鉄名古屋本線【妙興寺】駅下車徒歩7分
〒491-0922　一宮市大和町妙興寺2390
TEL 0586-46-3215　FAX 0586-46-3216
【観覧料】（常設展・聴講料含む・特別展の場合は別途定める。）
一般＝200円（160円）　高・大生＝100円（80円）
小中生＝50円（40円）　＊（　）は20人以上の団体料金
【休館日】毎週月曜日、祝休日の翌日、年末年始
【開館時間】午前9時30分～午後5時（入館は4時30分まで）
※学校休業日の土曜日は小・中学生無料。
※65歳以上で、一宮市発行の「老人医療費受給者証」あるいは「シルバー優待証明カード」持参の方は無料。

配水塔模型　昭和10年頃
夏の企画展『一宮市制80周年回顧展』より

一宮市博物館だより第29号　発行日……平成13年10月5日　編集・発行…一宮市博物館　印刷……サンメッセ株式会社